

「通信全覧」「続通信全覧」重要文化財指定記念

外務省外交史料館 特別展示

# 幕末へのいざない

第1部 黒船・開国・激動の幕末

英蘭と部  
五月十八日、英國、シロコシ、汽船と輪

領料以受巻之

公使渡来



平成 28 年 7 月 7 日 (木) ~ 9 月 30 日 (金)

於：外務省外交史料館別館展示室

## 第1部 黒船・開国・激動の幕末

### 目次

|                             |      |
|-----------------------------|------|
| はじめに ～「通信全覧」とは～             | -1-  |
| 第1章 ペリー来航と開国 1853           | -2-  |
| 1-1 ペリー来航の情報                |      |
| 1-2 黒船来航                    |      |
| 1-3 米国大統領の国書                |      |
| 1-4 『ペリー提督日本遠征記』            |      |
| 第2章 欧米への使節団派遣 1858～1862     | -8-  |
| 2-1 万延元年の遣米使節：派遣まで          |      |
| 2-2 万延元年の遣米使節：咸臨丸・ポーハタン号の出帆 |      |
| 2-3 万延元年の遣米使節：航海            |      |
| 2-4 文久元年の遣欧使節               |      |
| ～トピック 幕末の海外留学～              | -14- |
| 第3章 攘夷の嵐のなかで 1861～1863      | -16- |
| 3-1 ヒュースケンの遭難               |      |
| 3-2 東禅寺事件                   |      |
| 3-3 生麦事件                    |      |
| 3-4 薩英戦争                    |      |
| 第4章 大政奉還から明治新政府へ 1867～1868  | -21- |
| 4-1 大政奉還                    |      |
| 4-2 王政復古の大号令                |      |
| 4-3 各国に対する徳川慶喜の宣言           |      |
| 4-4 新政府による外交の開始             |      |
| おわりに                        | -26- |
| 展示史料の出典一覧                   |      |
| 主要参考文献                      |      |

## はじめに ～「通信全覧」とは～

「通信全覧」と「続通信全覧」は、幕末期における諸外国との往復書翰や会談記録、各種の草案などの文書を、独自の分類方法で再整理して清書しなおしたものです。その目的は執務の参考として利用することにあり、各国別の編年文書（日付順に綴ったもの）と個別事件・事項ごとに整理したものから構成されています。

「通信全覧」は、1859（安政6）年と1860（万延元）年の外交文書を徳川幕府が編集したもので、全部で320巻あります。

「続通信全覧」は「通信全覧」の後をうけて、1861（文久元）年から1868（慶応4）年までの編年文書に、修好・貿易などの事項別部門を加えて外務省が編集・分類したものです。1871（明治4）年に一時着手し、本格的には明治7年から約10年をかけて完成させ、現在1784巻が残っています。

本特別展示は、外交史料館の所蔵する幕末期の外交文書集「通信全覧」「続通信全覧」が国の重要文化財に指定されたことを記念するものです。

その第1部として、平成28年7月7日から9月30日まで、「黒船・開国・激動の幕末」と題し、ペリー来航から大政奉還に至る幕末の政治・社会の動きを「通信全覧」と「続通信全覧」によって紹介し、ペリー来航の情報がどのように伝えられたのか、攘夷に揺れる日本はどのように外国と向き合ったのかを探っていきます。



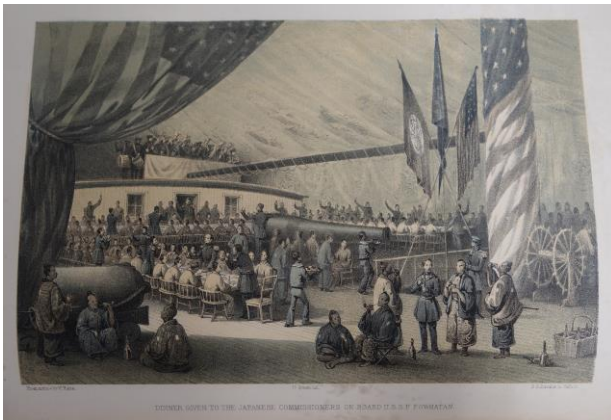
## 第1章 ペリー来航と開国 1853

徳川幕府の時代、鎖国政策によって、日本はオランダ以外の西洋諸国との通商関係がありませんでした。この鎖国政策を転換させたのはアメリカでした。

郵船航路が整備されて海上交通が活発になるなかで、米国内では清国との貿易のための太平洋航路開設への要請が高まり、その中継地点として日本の重要性が増しました。そこで米国政府内で日本への使節派遣が検討された結果、ペリーが日本を開国させるための交渉に向かうこととなりました。

徳川幕府はオランダ風説書を通じてペリー来航に関する情報を事前に把握していました。当時の幕府は、鎖国政策を維持しつつ、西洋列強に対抗するため国防力の強化や1825（文政8）年に出された異国船打払令の復活を考えていました。しかし、いずれも十分な対策がとられないまま、ペリーの来航を迎えることになりました。

本章では、幕府がペリー来航の情報を入手してからフィルモア米大統領の国書を受け取るまでの場面を紹介します。

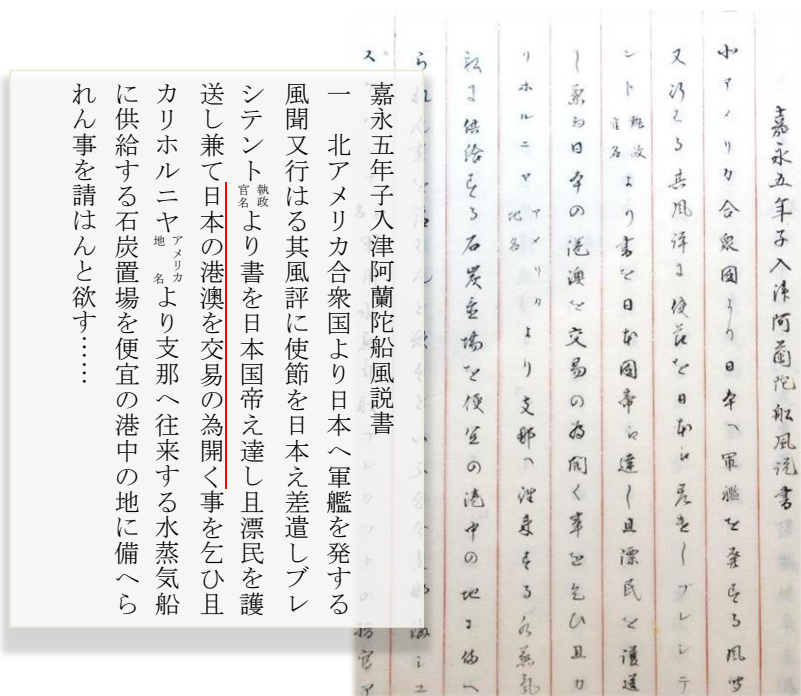


【パネル】ポーハタン号での正宴の絵  
『ペリー提督日本遠征記』第1巻所収。

## 1-1 ペリー来航の情報

オランダ風説書とは、オランダ船が長崎の出島に来航する度に、オランダ商館長より幕府に提出された海外情報をまとめた書物です。鎖国体制下の当時においては、風説書は海外の情勢を知る貴重な情報源でした。

展示史料は 1852（嘉永 5）年のオランダ風説書の写しです。これには、アメリカが日本へ軍艦を派遣した目的として、日本国帝に大統領の国書を渡し、漂流民の保護と日本の港を貿易のために開くことを求め、都合の良い港に石炭貯蔵場を設けるよう要請しようとしていたことなどが具体的に記されています。



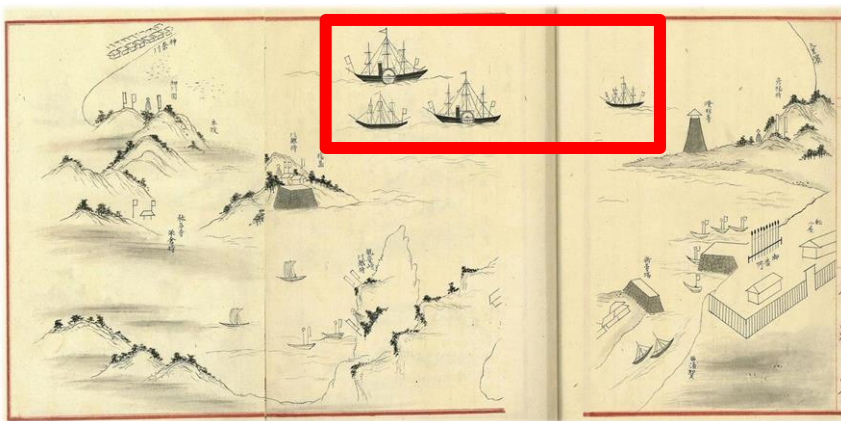
### 展示史料 1-1

1852（嘉永 5）年の阿蘭陀船風説書（翻刻）  
阿蘭陀＝オランダ

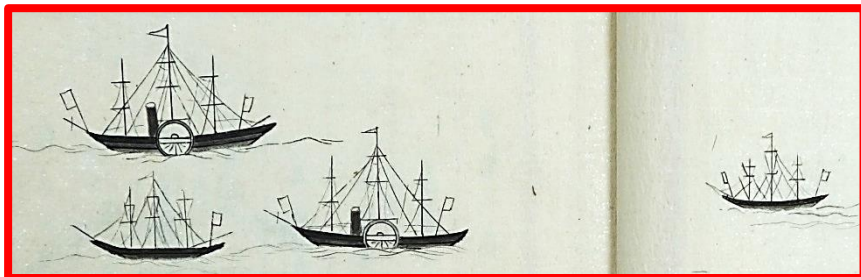
## 1-2 黒船来航

1853 年 7 月 8 日（嘉永 6 年 6 月 3 日）、米国のペリー東インド艦隊司令長官が軍艦 4 隻（サスケハナ号、ミシシippi号、プリマス号、サラトガ号）を率いて浦賀沖に来航しました。

ペリーの態度は強硬で、国書の受理を要求し、幕府が対応に苦慮する間に江戸湾に進入して測量を行ったため、日本側の人心を動揺させました。



拡大図



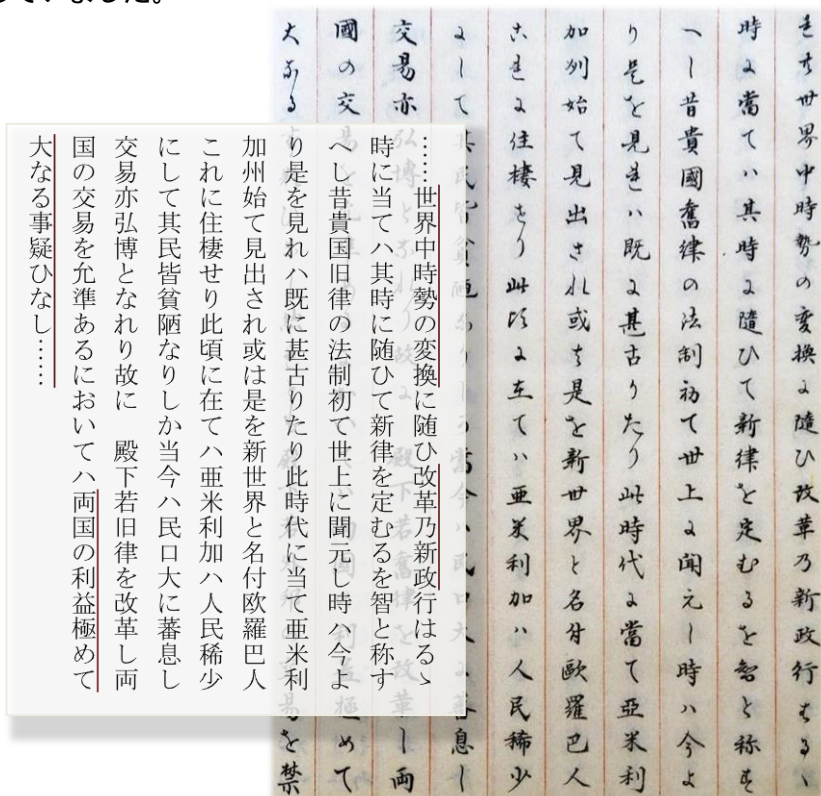
展示史料 1-2  
黒船来航の図



### 1-3 米国大統領の国書

1853 年 7 月 14 日（嘉永 6 年 6 月 9 日）、久里浜（現在の神奈川県横須賀市）でペリーは浦賀奉行に国書を渡しました。

ペリーが持参したフィルモア米国大統領の国書の内容は、アメリカ合衆国と日本が国交を結ぶことを提案するために使節を派遣するというものでした。国書は「世界中時勢の変換」とともに「改革乃新政」が行われるなかで、もし日本が旧律を改め交易を承認すれば「両国の利益極めて大なる事疑ひなし」として、日本の開国を求めています。



展示史料 1-3  
フィルモア大統領の国書

## 1-4 『ペリー提督日本遠征記』

『ペリー提督日本遠征記』は、ペリー自身の日記、公文書や艦隊乗組員の日記・報告書などをもとに作成され、ペリー自らが監修しました。全3巻からなり、第1巻には航海や交渉の様子が記されています。第2巻では各地の農業、魚類、植物の調査や小笠原・琉球の踏査報告が、第3巻では、各地の天体観測図などが収録されています。

ちなみに、正式名称の和訳は、『米政府の命による米海軍 M.C. ペリー提督指揮下の 1852、1853、1854 年における米艦隊の中国海域および日本遠征記』です。本書の挿絵は、ペリー艦隊に随行した絵師ヴィルヘルム・ハイネにより描かれました。

※『ペリー提督日本遠征記』は川上昌明氏（故川上健三元外務省参与の長男）より寄贈されたものです。



展示史料 1-4 『ペリー提督日本遠征記』第1巻より  
久里浜への初上陸





浦賀奉行にアメリカ大統領の国書を手交



横浜におけるペリーと林大学頭との会談

## 第2章 欧米への使節団派遣 1858~1862

翌 1854 年、ペリーは軍艦 7 隻を率いて再び来航し、3 月 31 日（嘉永 7 年 3 月 3 日）に日米和親条約が、さらに 6 月 17 日（5 月 22 日）には日米和親条約附録が結ばれました。

こうして開国への第一歩を踏み出すこととなった幕府は、1858 年 7 月 29 日（安政 5 年 6 月 19 日）に日米修好通商条約を締結し、これを皮切りにオランダ、ロシア、イギリス、フランスとも次々に修好通商条約を結びました（安政の五カ国条約）。

こうして長く続いた鎖国は終わり、外国貿易が始まりました。また、幕府は条約を履行するための様々な対応に追われることになり、中でも、条約の批准や実施延期を交渉するため欧米へ使節団を派遣したことは、開国後、最初の公式訪問という点で特筆すべき出来事でした。



### 【参考】

「日米修好通商条約」

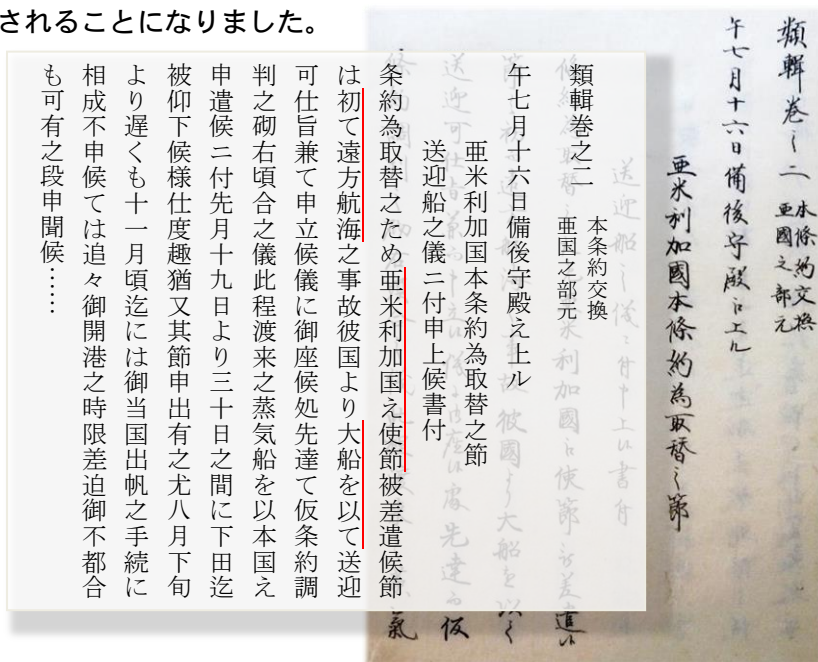
日本側全権井上清直、岩瀬忠震と  
ハリス米国総領事との間で調印

## 2-1 万延元年の遣米使節：派遣まで

日米修好通商条約の交渉過程で、幕府は条約批准書の交換を行うために日本からワシントンへの使節派遣を提案し、アメリカの同意を得ました。使節の派遣を主唱したのは、外国奉行の岩瀬忠震（ただなり）、水野忠徳（ただのり）です。彼らは批准書の交換だけでなく、この機会に外国の事情を視察したいと考えていました。

展示史料は1859（安政6）年7月に水野忠徳らが遣米使節団の派遣について幕閣に提出した意見書です。幕府にとって初めての遠方航海であることや、以前からアメリカが大船による送迎を提案していたことが記されています。水野らは開港期限や送迎船の都合もあるため手続きを早急に行う必要があると具申しました。

その後、正使に新見正興（まさおき）、副使に村垣範正（のりまさ）（2人はともに外国奉行兼神奈川奉行）が選ばれ、総勢 77 名の使節団が派遣されることになりました。

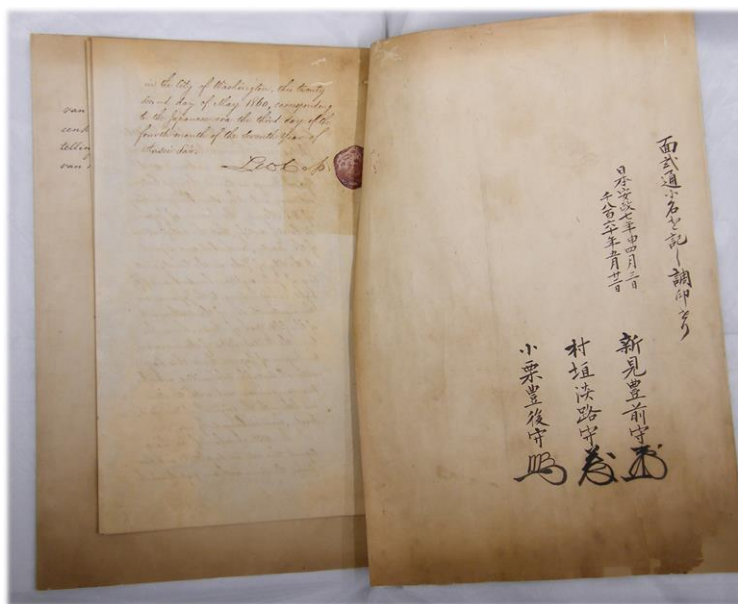


展示史料 2-1  
遣米使節団派遣に関する水野忠徳らの意見書

## 2-2 万延元年の遣米使節：咸臨丸・ポーハタン号の出帆

展示史料は、新見正興らが 1859 年 10 月（安政 6 年 9 月）、使節をアメリカだけでなく、修好通商条約を結んだ他の 4 か国へも派遣するか否かを伺った文書です。新見らはアメリカだけに使節を派遣すれば、他の 4 か国から理由を問われたときに困ると述べましたが、結局この時はアメリカのみの派遣となりました。

また幕府は、アメリカから来航した軍艦ポーハタン号に加え、護衛艦として軍艦咸臨丸をサンフランシスコまで航海させることにしました。咸臨丸には軍艦奉行の木村芥舟（かいしゅう）、艦長の勝麟太郎（海舟）、福沢諭吉らが搭乗し、1860 年 2 月 10 日（万延元年 1 月 19 日）、アメリカに向けて浦賀を出発しました。次いで 2 月 13 日に新見正興ら遣米使節が米艦ポーハタン号に搭乗し横浜を出発しました。



【参考】「日米修好通商条約批准書交換証書」の署名部分  
正使新見正興（豊前守）、副使村垣範正（淡路守）、目付小栗忠順（豊後守）の署名があります。

## 2-3 万延元年の遣米使節：航海

展示史料は軍艦奉行の木村芥舟が咸臨丸の出帆から帰国までの状況を詳細に記した報告書です。

咸臨丸の船旅は、暴風や波浪によって連日時化が続くなど困難に見舞われましたが、1860年3月18日（安政6年2月26日）、サンフランシスコに到着しました。遣米使節団が乗船したポーハタン号はその12日後に到着しました。使節団一行は、損傷の激しい咸臨丸を同地に残し、パナマを経由して5月15日にワシントンに到着しました。翌16日にキャス国务長官を訪問し、17日にはブキャナン大統領に謁見し、批准書を交換しました。

一行はワシントンに25日間滞在し、スミソニアン博物館、国会議事堂、海軍工廠、海軍天文台などを訪れました。そして6月5日、再び大統領に謁見し、その後キャス国务長官から使節3人に金メダル、随員に銀メダル、従者に銅メダルが贈られました。

修理を終えた咸臨丸は、3月にサンフランシスコを出発し、6月23日に浦賀に戻ってきました。一方、遣米使節は米艦ナイヤガラ号に乗船し、6月29日にニューヨークを出発しアフリカ、ジャカルタ、香港を経由して11月9日に帰国しました。



【参考】「咸臨丸風波ノ図」

本図はアメリカから帰国した1年半後に小笠原島探索に向かう咸臨丸です。第2部で原本を展示します。



## 2-4 文久元年の遣欧使節

安政の修好通商条約では、兵庫・新潟の開港と江戸・大坂の開市（外国人の居留を許可すること）を定めていましたが（新潟 1860 年、江戸 1862 年、兵庫・大坂 1863 年の各 1 月 1 日に開港・開市を実施）、幕府は国内の政治・経済状況が安定するまで、これらの開港・開市を延期するよう各国に求めました。

これに対しオールcock駐日イギリス公使は、1860 年 8 月 27 日（万延元年 7 月 11 日）の会談で、開港・開市の延期は条約の目的に反するとしながらも、幕府がイギリスをはじめとする各締約国へ全権使節団を派遣し、直接交渉することを提案しました。

|                                                                                                                                           |                                                                                   |                                                                                                                                                            |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>【翻刻】</p> <p>一 其許不同意之上ハ政府へ使節差遣候も無益之事<br/>二 無之哉</p> <p>一 御書翰ニて延期之事被仰遣候ハ、私よりハ私の存寄を認メ本国政府へ可申遣候併夫よりハ御人撰にて使節被差遣延期之儀ニ付利害得失御弁論有之候へハ可然儀と奉存候</p> |  | <p>【現代語訳】</p> <p>日本側</p> <p>あなたが（開港・開市の延期に）不同意では使節を派遣しても無益ではないでしょうか。</p> <p>オールcock</p> <p>書簡で延期を申し出れば私からも自身の見解を本国政府へ報告します。使節を派遣して利害得失を弁論すればよろしいと考えます。</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

### 展示史料 2-4

老中脇坂安宅・安藤信正とオールcockの会談

1862 年 1 月 21 日（文久元年 12 月 22 日）、竹内保徳を正使、松平康直を副使、京極高朗を目付（監察使）とする全 36 名（のちに 2 名加わる）の幕府使節団が、イギリス軍艦オーディン号に乗って欧州の締約国（フランス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル）へと向かいました。使節団に与えられた主な役割は、開港・開市の延期を確約させること、西洋事情を視察すること、ロシアとの間に樺太の境界を定めることでした。

使節団は最初にフランスを訪れたのちイギリスに渡り、1862 年 6 月 6 日（文久 2 年 5 月 9 日）にロンドンで開港・開市を 1868 年 1 月 1 日まで延期する覚書を結びました（その代わりに貿易に関する日本側の制限や干渉を撤廃すると約束）。このロンドン覚書を皮切りに、オランダ、プロシア、ロシア、フランス、ポルトガルとも同様の覚書を取り交わし、約 1 年間に及ぶ旅程を終え、1863 年 1 月に帰国しました。

ちなみに、この使節団の随員のなかには、福沢諭吉（慶應義塾の創設者）、福地源一郎（桜痴、ジャーナリスト、衆議院議員）、松木弘安（寺島宗則、外務卿）、箕作秋坪（啓蒙思想家）など、洋行の見聞を生かして後に活躍した人物がいました。



【ヨーロッパで撮影された文久使節団の写真】  
上段左から竹内保徳（下野守）、松平康直（岩見守）、京極高朗（能登守）。  
下段左から福沢諭吉、福地源一郎。

## トピック 幕末の海外留学

18 世紀以降、書物を通じて、日本でも間接的に西洋文明に触れる機会がありました。自然科学や技術の先進性、優越性にふれた人々は、海外へのイメージを大きく膨らませ、世界の「現実」を知らなければならぬと考えるようになりました。

本トピックでは、幕末の海外留学についてとりあげます。

### 【1】1866 年 1 月 7 日付水野忠精らよりパークス駐日イギリス公使宛書翰

【翻刻】  
以書翰申入候今般我政府にお  
いて新に文武学政振興いたし  
度候に付貴国より教師相招三  
兵技芸伝習受申度既に其旨其  
許へ談判および候儀に有之候  
処元来三兵技芸は軍政之細目  
にて治国之要領にも無之被存  
候に付右伝習之方は暫見合当  
今差向相頼度儀は貴国都府へ  
生徒三四拾名人物相撰取締之  
士官相添差遣候間右之もの共  
へ政事兵制其他士官之心得へ  
き学科伝習相頼申度存候左候  
ハ、生徒學術之成熟は勿論貴  
国隆盛之制度も見習旁以我國  
之裨益少なからざる……

幕府は「新に文武学政振興」のため、それ以前に依頼していたイギリス人教師の招聘を見合わせ、生徒 30～40 名をイギリスへ派遣して政治や軍事制度を勉強させたいと要望しました。この留学生のなかに、中村正直や林董がいました。

### 【2】1867 年 7 月 13 日付小笠原長行よりロッシュ駐日フランス公使宛書翰

さらに幕府はフランスへも少壮の士官を派遣したいと要請しました。

幕府の外国方に勤務していた田辺太一は後に回顧して、このように幕府がイギリス、フランス、ロシアなどに留学生を送って、軍事ばかりではなく様々な学科を学ばせたことは、幕府の政略が「一変」したからであると述べています。

一方で、薩摩藩や長州藩も 1863～64 年に欧米列国との武力衝突を経験して、西洋文明を実感するに至り、以後、幕府のみならず藩藩もこぞって留学生を海外に派遣して人材の育成に努めるようになりました。

## 幕末の海外留学生とその後の活躍の一例

◎1862（文久2）年オランダへの留学生（幕府派遣）

榎本武揚：駐ロシア公使、農商務大臣、外務大臣

赤松大三郎（則良）：海軍中將、貴族院議員

西周：啓蒙思想家、明六社創立、貴族院議員

津田真道：元老院議員、初代衆議院副議長



伊藤博文

◎1863（文久3）年イギリスへの留学生（長州藩）

伊藤博文：内閣総理大臣

井上馨：外務大臣、大蔵大臣

山尾庸三：工部卿

井上勝：鉄道庁長官

遠藤謹助：大蔵省造幣局長

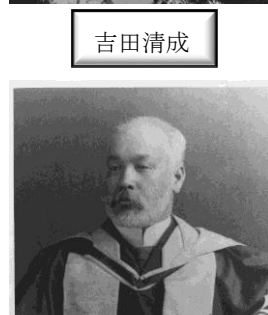


◎1865（慶応元）年イギリスへの留学生（薩摩藩）

森有礼：文部大臣

鮫島尚信：駐フランス公使、外務大輔

吉田清成：駐アメリカ公使、外務大輔、農商務大輔



吉田清成

◎1866（慶応2年）イギリスへの留学生（幕府派遣）

中村正直：啓蒙思想家、東京大学文学部教授

外山正一：東京帝国大学教授、東京帝国大学総長

林董：駐イギリス公使、外務大臣

菊池大麓：東京帝国大学総長



林董

◎1867（慶応3）年フランスへの留学生（幕府派遣）

徳川昭武：水戸藩知事

保科俊太郎：陸軍省人事局長

山内文次郎：駐イタリア代理公使、宮中顧問官

### 第3章 攘夷の嵐のなかで 1861~1863

鎖国政策の転換によって海外との貿易が始まると、輸出の増大や金の流出、物価高騰により社会不安が増し、政治的、経済的な混乱も引き起こされました。やがて攘夷論が高まり、1860年代前半になると外国人殺傷事件が頻発しました。時代はまさに攘夷の嵐が吹き荒れました。

幕府は西洋文明の摂取を行うべく、若い人材を次々に海外に送り見聞を広めさせました。ところが幕府の随員としての任務を終えて1863年1月に帰国した福地源一郎が、僅か一年の間に「我国の形勢は全く一変」したと回想したように、国内では攘夷運動が急速に高まりを見せていました。海外で多くの事を学んだ幕府の役人が帰朝したことすら秘密にし、なるべく穏便に生活して海外の事を口外してはならないとの幕府の命令が出るほどでした。

一方、薩摩藩や長州藩は1863~64（文久3~4）年に、欧米列国と武力衝突しました。これを機に両藩は、攘夷の無謀を悟り、欧米との関係改善に向かっていきます。

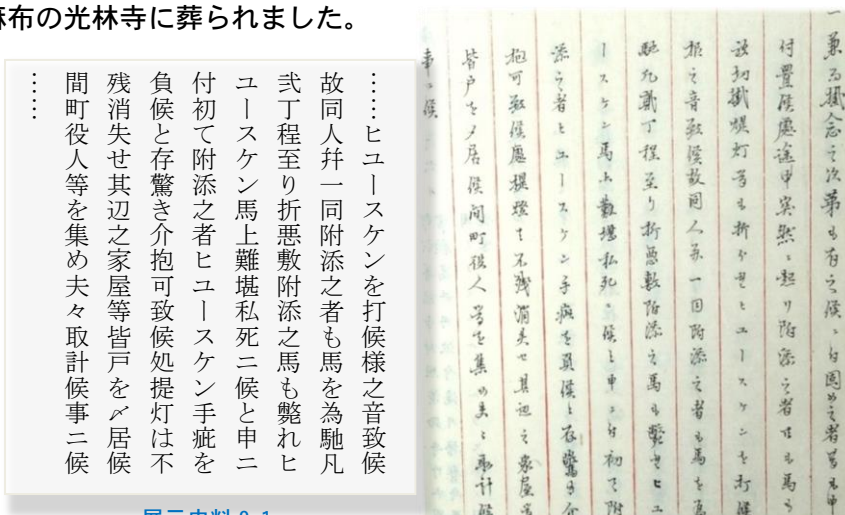
第3章では、攘夷運動の激化や外国人が日本国内で活動するようになったことで生じた事件として、ヒュースケンの遭難、東禅寺事件、生麦事件を取り上げます。また、生麦事件の犯人処罰と賠償をめぐる発生した薩摩藩とイギリス艦隊との武力衝突事件（いわゆる薩英戦争）にも目を向けます。



### 3-1 ヒュースケンの遭難

1858 年（安政 5 年）の安政 5 か国条約締結により、各国の公使はいわゆる四宿寺（公使館の仮舎を寺院に設けたもの。高輪の東禅寺はイギリス、三田の済海寺はフランス、芝の西応寺はオランダ、麻布の善福寺はアメリカの仮公使館）に駐在するようになりました。幕府は、公使たちの護衛に努め、四宿寺に多数の警備員を配備し、外出時にも警護にあたりました。幕府のこのような対応ぶりが攘夷運動の炎を煽ることになったと田辺太一は指摘しています。

1861 年 1 月 15 日（万延元年 12 月 5 日）、ハリス駐日アメリカ公使の通訳を務めていたヒュースケンは、薩摩藩士に襲撃され殺害されました。ヒュースケンはプロシア使節団の通訳も務めており、同使節団が滞在する赤羽根接遇所（当時、外賓との応接のために設けられた施設）から麻布善福寺（米国公使館）へ戻る途中で悲劇に見舞われました。展示史料は、事件翌日に村垣範正らとハリスとの間で交わされた対話記録です。幕府の措置に満足しない各国公使は、国旗を撤して横浜に退きました。また、本国から兵士を呼び寄せて自衛することを申し出る有様でした。しかし、長らく日本に滞在していたハリスは幕府の立場を理解しており、自分の属僚の死にも関わらず、善福寺に踏み留まりました。なお、ヒュースケンの遺骸は、1 月 18 日に南麻布の光林寺に葬られました。



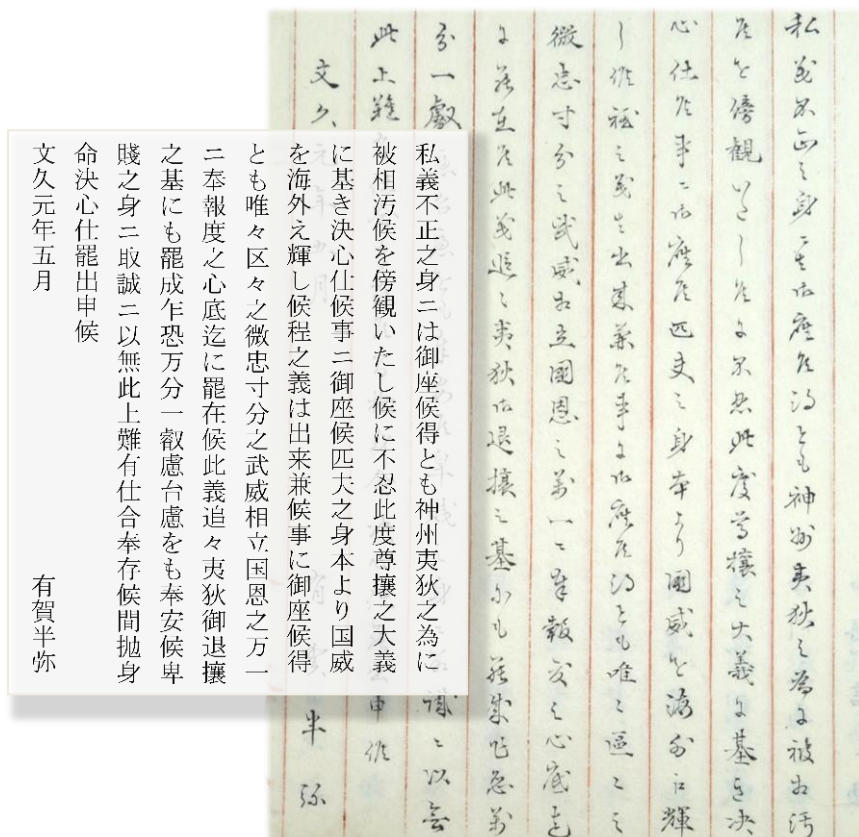
展示史料 3-1

ヒュースケンの遭難に関する老中とハリスの対談

### 3-2 東禪寺事件

1861年7月5日（文久元年5月28日）、水戸浪士の有賀半弥ら14名が、駐日イギリス公使オールコックの居住する江戸高輪の東禅寺を襲撃しました。浪士たちは「神州」の日本を外国人に汚されることを傍観できないと憤激して行動を起こしました。

警備をしていた旗本や郡山藩士、西尾藩士らが応戦して浪士たちと戦闘になり、双方に死傷者が出ました（警備兵 2 名、浪士側 3 名が死亡）。オールコックは危うく難を逃れましたが、書記官のオリファントと長崎駐在領事モリソンが負傷しました。



展示史料 3-2

攘夷を訴える有賀半弥らの連名意見書

### 3-3 生麦事件

1862 年 9 月 14 日（文久 2 年 8 月 21 日）、薩摩藩の島津久光一行の行列は神奈川の生麦村（現在の横浜市鶴見区生麦）を通行中、騎馬で遊行していたイギリス商人リチャードソンらと接触しました。これに激昂した薩摩藩士らがリチャードソンらを殺傷したのが生麦事件です。

幕府がこの事件の犯人逮捕に努めずに放任し、そのまま帰藩させたことは、外国人を保護すべき幕府の責任を果たさなかったものとして、各国の批判を浴びました。展示史料にあるように、駐日イギリス代理公使のニールは、幕府の警備の不備を厳しく非難しました。

幕府はイギリスの要求に応じて賠償金 10 万ポンドを支払いましたが、薩摩藩とイギリスの間では、事件解決交渉がまとまらないうちに、1863 年 8 月 15 日（文久 3 年 7 月 2 日）、武力衝突へと発展しました。

○粗暴非道の男子等外国人に行遇ふ時は如何なる事件を引出すも計り難きをよく知りながら其数多の人数の旅行を政府より許し給へるなり又此非道の人を警め或へ制するため大君の番兵一人も路上に居さるをも亦茲に述ざるを得ず是は甚だ悪き過なり○無罪の不列顛人の血に染る程の非道なる此不断及び無罰の悪事に対して厳処刑及び償ひ事を当今定むるは余が職掌にあらず是は我政府の裁判所にて決定するならん○是故に余取敢ず日本政府にて此殺害人を捕へて之れを慥に守り給はん事を願ふ……

#### 展示史料 3-3

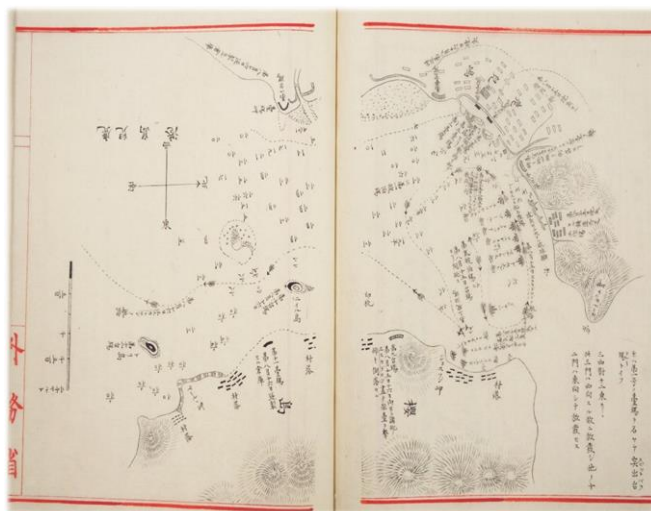
生麦事件について警備の不備を非難した英国側の書翰

### 3-4 薩英戦争

1863 年 8 月 11 日（文久 3 年 6 月 27 日）、7 隻の英国艦隊が鹿児島湾に現れました。イギリス側は武力を背景に生麦事件の犯人処罰と賠償金を要求しましたが、交渉は進まず、英国艦隊は武力行使を決意し、8 月 15 日、薩摩藩の船舶 3 隻を拿捕しました。これに対し薩摩藩は英国艦隊に砲撃を加え、旗艦ユーリアラス号の艦長など 13 名が戦死しました。薩摩側も各砲台が大破し、鹿児島市街の 1 割が炎上しました。

英国艦隊の近代兵器の威力を知った薩摩藩は、攘夷の不可能を自覚し、幕府の仲介で和平交渉に応じ、薩摩藩が 2 万 5、000 ポンドを幕府から借用して支払うことで和解が成立しました。和平交渉のなかで薩摩藩がイギリスに軍艦購入の周旋を依頼し、一方でイギリスも薩摩藩の善戦を評価し、以後、両者の間に親密な関係が築かれていくことになりました。

また、長州藩も四国艦隊による下関砲撃事件を経験し、攘夷の無謀を認識して、欧米との関係改善に努め、下関を実質的に開港して欧米との貿易を開始しました。



展示史料 3-4

薩摩所有の砲台及び薩摩港の図

## 第4章 大政奉還から明治新政府へ 1867~1868

1867年11月9日（慶応3年10月14日）に、徳川慶喜は大政奉還の上表を朝廷に提出しました。翌日、朝廷は徳川慶喜の参内を求め、大政奉還を許す御沙汰書を渡しました。その後、王政復古が宣言されました。

徳川慶喜は、大政奉還後も引き続き外交は自分たちが担うとの意向を示していましたが、やがてそれも新政府に引き渡すこととなり、名実ともに明治時代がはじまることとなります。

本章では、1867年の大政奉還から王政復古が実現する過程と、その後も徳川家が外交を担おうとした事実及び、明治政府による外交が開始されるまでを紹介します。



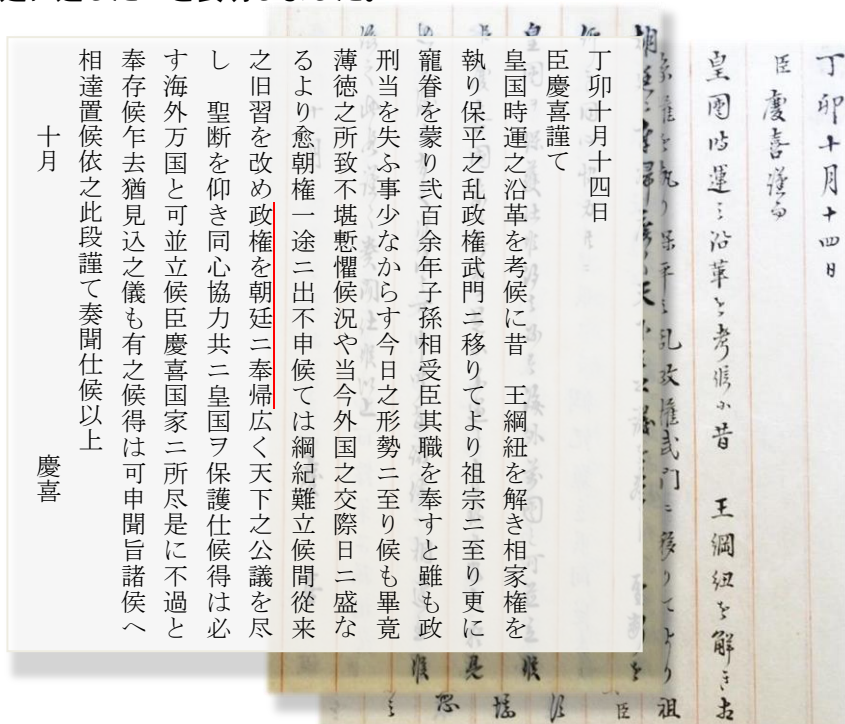


## 4-1 大政奉還

1867年11月8日（慶応3年10月13日）、幕府は在京10万石以上の諸藩の重臣を二条城に集め、大政奉還の上表案について可否を問いました。

この会合で、多くの重臣は大政奉還についての明確な意見を示さずに退出しましたが、会合後、薩摩藩の小松帯刀、土佐藩の後藤象二郎らが居残り、慶喜に対して政権返上への賛意を表する一幕もありました。

慶喜は翌14日に大政奉還の上表文を朝廷に提出し、外国との交際が増えるなかで、政権が一つでなければならないと論じ、政権を朝廷に返したいと表明しました。



展示史料 4-1

徳川慶喜の上表文

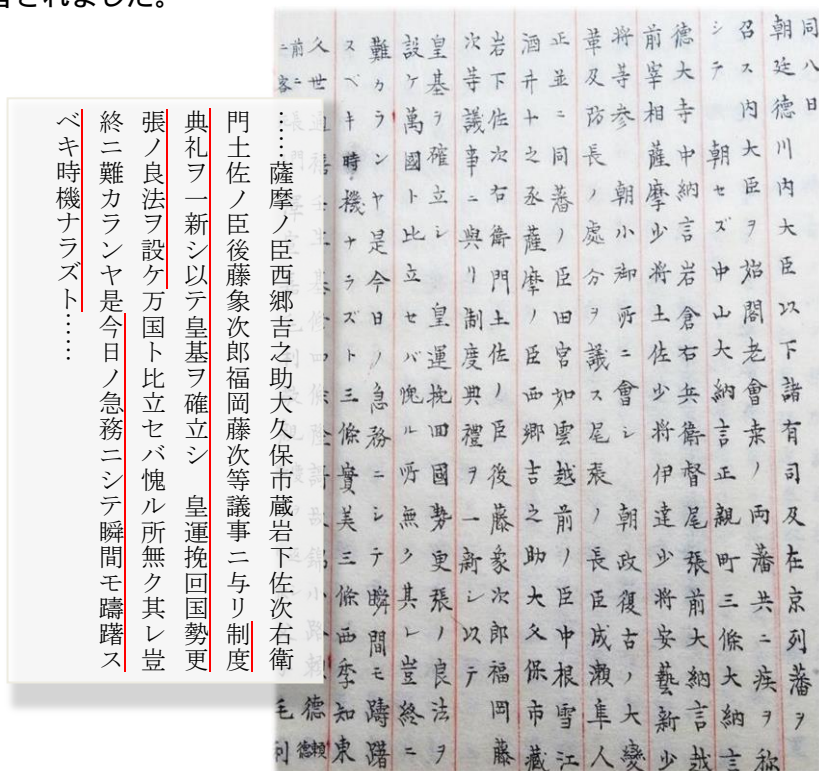


## 4-2 王政復古の号令

大政奉還は幕政を王政に吸収させ、国政を一元化する形をとっていましたが、なお旧幕府の勢力は温存されていました。倒幕派は完全な幕権の消滅をはかり、王政復古を実現しようと画策しました。

1868年1月2日（慶応3年12月8日）、朝廷での会議の席上、薩摩の西郷吉之助（隆盛）、大久保市蔵（利通）、土佐の後藤象次郎、福岡藩次（孝弟）らは、制度典礼を一新し、「国勢更張ノ良法」を立てることが今日の急務であると主張しました。

会議は翌3日の朝まで続き、会議後その日のうちに王政復古が宣言されました。



……薩摩ノ臣西郷吉之助大久保市蔵岩下佐次右衛門土佐ノ臣後藤象次郎福岡藩次等議事ニ与リ制度典礼ヲ一新シ以テ皇基ヲ確立シ 皇運挽回國勢更張ノ良法ヲ設ケ万国ト比立セバ愧ル所無ク其レ豈終ニ難カラシヤ是今日ノ急務ニシテ瞬間モ躊躇スベキ時機ナラズト……

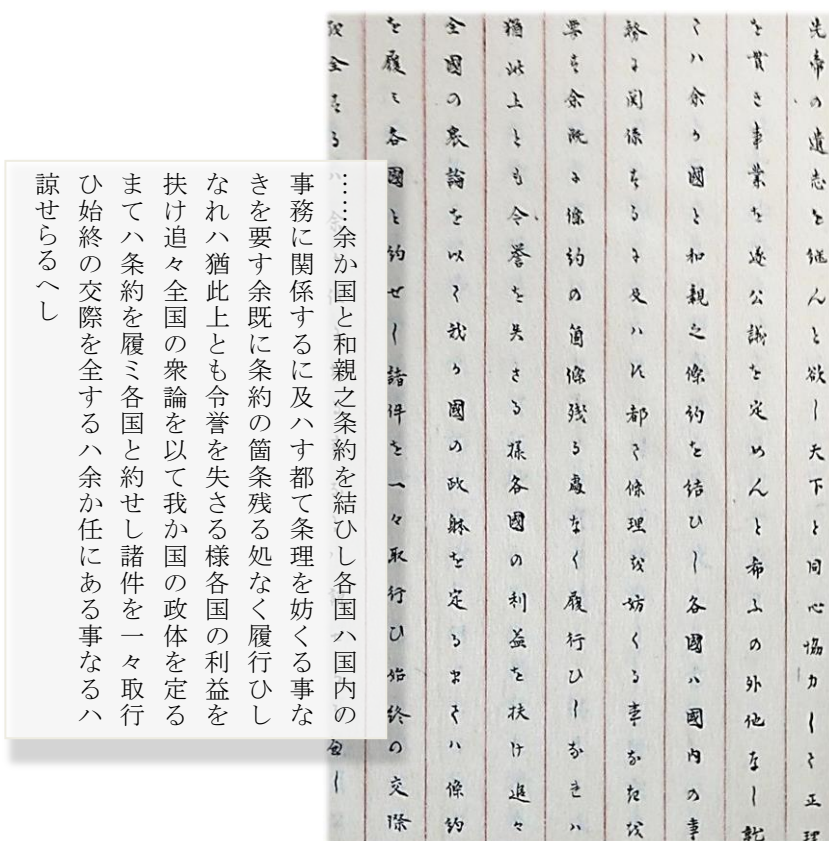
展示史料 4-2

西郷隆盛らが制度典礼の一新を求めた会議の様子

## 4-3 各国に対する徳川慶喜の宣言

1868 年 1 月 10 日（慶応 3 年 12 月 16 日）、徳川慶喜はフランス、イギリス、イタリア、アメリカ、プロシア、オランダ各公使と大坂城で会見し、大政奉還の事情を説明し、各国との外交事務は引続き幕府が行うことを宣言しました。

展示史料はその際の宣言書です。この中で慶喜は、「全国の衆論」をもって日本の政体が定まるまでは、各国と結んだ条約を遵守し外交関係を全うすることが自分の責任だと述べています。



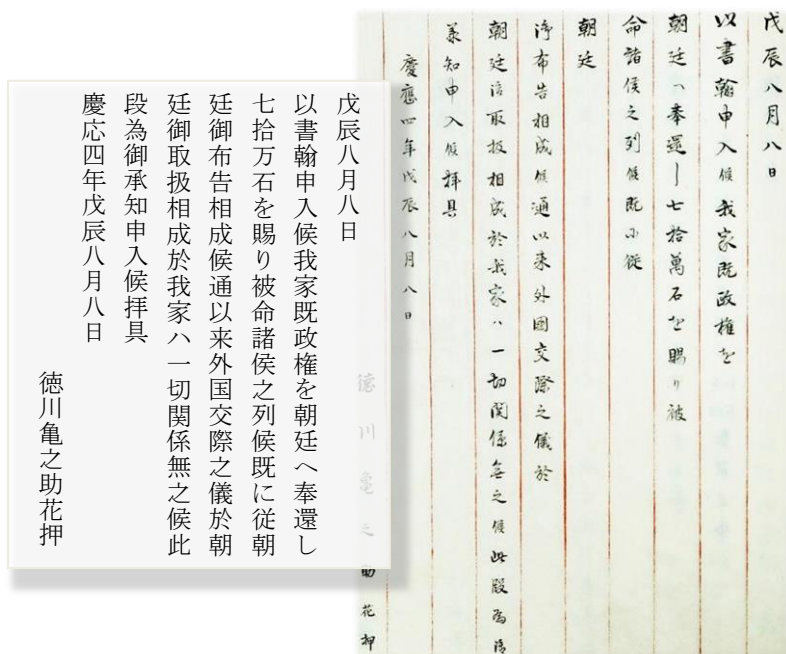
### 展示史料 4-3

大政奉還後も幕府が外交事務を行うことを伝える徳川慶喜の答諭

## 4-4 新政府による外交の開始

1868年2月8日（慶応4年正月15日）、勅使東久世通禧が各国（フランス、イギリス、オランダ、イタリア、アメリカ、プロシア）公使と兵庫で会見し、王政復古を報じた国書（1868年2月3日付）を交付しました（これは、新政府の官員と外国人が正式に応接した最初の事例とされています）。幕府は「公法」による外国交際を行うと布告しました。これ以降、外交を行うための機構が何度か改編され整備されていきます。

そうしたなかで、同年9月23日、徳川亀之助（家達）が外交は朝廷で取扱い、徳川家は外国交際（外交）に関与しないことを各国公使に通知しました。徳川幕府による外交は終焉を迎え、新政府による外交が始まっていくことになります。



### 展示史料 4-4

徳川家が外交に関与しないことを通知した徳川亀之助の書翰

## おわりに

本展示では、「通信全覧」「続通信全覧」に記録された幕末日本の激動を、主に政治面に焦点を当てて紹介しました。

当時の幕府は、日々の外交実務をうまく処理して外交交渉を優位に進めるためには、文書を適切に記録・整理しておくことがとても重要だと考えていました。「通信全覧」「続通信全覧」というこれら約2,000冊の史料群が残されてきた事実は、幕府が文書整理をいかに重視していたかを今日の我々に伝えています。

本解説のなかでも言葉を引用した田辺太一や福地源一郎も、外交における記録作成の重要性を強調していました。福地は、記録は次なる交渉の先例となり得るものであり、記録作成担当部局は「外交の機軸」であると述べました。それは、記録作成部局が各事件の顛末を整理するのみならず、外交交渉を進めるための応答要領までも作成していたことからもうかがえます。記録を残すという仕事は、激動の時代であるからこそ、その荒波にのみこまれないような記録を作らなければならないという気概に支えられていたのかもしれない。

本展示では、膨大な「通信全覧」「続通信全覧」のなかからほんの一部分を紹介したに過ぎません。これらの文書によって、外交のみならず、政治、社会の様相が世界と向き合った幕末日本の姿を少しでもお伝えできていれば幸いです。

# 展示史料の出典一覧

## 第1章

- 1-1 続通信全覧類輯之部修好門 79「米使ペルリ初テ渡来以前荷蘭国ヨリ忠告一件」
- 1-2 続通信全覧類輯之部修好門 81「米使ペルリ初テ渡来浦賀栗浜ニ於テ国書進呈一件 一」
- 1-3 続通信全覧類輯之部修好門 84「米使ペルリ初テ渡来浦賀栗浜ニ於テ国書進呈一件 四」
- 1-4 『ペリー提督日本遠征記』第1巻

## 第2章

- 2-1 通信全覧 65「類輯二 本条約交換 亜国之部 元」
- 2-2 続通信全覧類輯之部修好門 138「新見豊前守等米国渡航本条約書交換一件 一」
- 2-3 続通信全覧類輯之部羈旅門 800「木村摂津守米国渡航一件 二」
- 2-4 通信全覧 170「英国御対話五（万延元年）」

## トピック

- 1 続通信全覧類輯之部芸学門 1096「英国留学一件 一」
- 2 続通信全覧類輯之部芸学門 1100「仏国留学一件 一」

## 第3章

- 3-1 続通信全覧類輯之部暴行門 1129「米国書記官ヒュースケン遭害一件 一」
- 3-2 続通信全覧類輯之部暴行門 1134「東禅寺英仮公使館兇徒襲撃一件 二」
- 3-3 続通信全覧類輯之部暴行門 1164「生麦殺傷一件 一」
- 3-4 続通信全覧類輯之部暴行門 1181「生麦殺傷一件 附録一」

## 第4章

- 4-1 続通信全覧類輯之部雑 1258「将軍太政返上事件 一」
- 4-2 続通信全覧類輯之部雑 1261「将軍太政返上事件 四」
- 4-3 続通信全覧編年之部 419「仏国往復書翰十七（慶応三年）」
- 4-4 続通信全覧編年之部 466「英国往復書翰四（慶応四年）」

| 幕末日本の関係略年表 |    |    |       |    |    |                                 |
|------------|----|----|-------|----|----|---------------------------------|
| 年(西暦)      | 月  | 日  | 年(和暦) | 月  | 日  | 出来事                             |
| 1853       | 8  | 11 | 嘉永6   | 7  | 7  | ペリーが浦賀に来航                       |
| 1853       | 7  | 14 | 嘉永6   | 6  | 9  | 浦賀でフィルモア大統領の国書を受け取る             |
| 1854       | 3  | 31 | 嘉永7   | 3  | 3  | 日米和親条約調印                        |
| 1856       | 9  | 3  | 安政3   | 8  | 5  | ハリス駐日米国総領事が下田の玉泉寺に仮公使館を開設       |
| 1858       |    |    | 安政5   |    |    | 安政の五カ国条約                        |
| 1859       | 6  | 26 | 安政6   | 5  | 26 | オールコック駐日英国総領事の着任、東禅寺に仮公使館を設置    |
| 1860       | 5  | 23 | 万延元   | 4  | 3  | 日米修好通商条約の批准書交換                  |
| 1860       | 1  | 15 | 万延元   | 12 | 5  | ヒュースケン遭難                        |
| 1861       | 7  | 5  | 文久元   | 5  | 28 | 東禅寺襲撃事件                         |
| 1862       | 1  | 21 | 文久元   | 12 | 22 | 竹内保徳ら遣欧使節出発(翌年12月9日帰朝)          |
| 1862       | 9  | 14 | 文久2   | 8  | 21 | 生麦事件                            |
| 1863       | 8  | 15 | 文久3   | 7  | 2  | 薩英戦争                            |
| 1864       | 9  | 5  | 元治元   | 8  | 5  | 英仏米蘭の連合艦隊による下関砲撃                |
| 1865       | 6  | 9  | 慶応元   | 5  | 16 | 新任の駐日公使パークスの来日                  |
| 1867       | 2  | 15 | 慶応3   | 1  | 11 | 徳川昭武がパリ万博のため出発                  |
| 1867       | 11 | 9  | 慶応3   | 10 | 14 | 徳川慶喜が大政奉還を申出る(翌日朝廷受諾)           |
| 1868       | 1  | 3  | 慶応3   | 12 | 9  | 王政復古の大号令                        |
| 1868       | 1  | 10 | 慶応3   | 12 | 16 | 徳川慶喜が政権返上後も外交は幕府が管轄する旨を各国公使に通告  |
| 1868       | 1  | 27 | 慶応4   | 1  | 3  | 鳥羽・伏見の戦い、戊辰戦争始まる                |
| 1868       | 2  | 8  | 慶応4   | 1  | 15 | 新政府が外交に当る旨の国書を各国公使に手交           |
| 1868       | 9  | 23 | 慶応4   | 8  | 8  | 徳川亀之助(家達)が徳川家は外交に関与しない旨を各国公使に通告 |
| 1869       | 8  | 15 | 明治2   | 7  | 8  | 外国官を廃止して、外務省を設置(初代外務卿沢宣嘉)       |



### 【主要参考文献】

- ・ M.C.ペリー監修・F.L.ホークス編『ペリー提督日本遠征記』第1巻、1856年
- ・ 福地桜痴『懷往事談 附新聞紙実歴』（民友社、1897年）
- ・ 小鷹狩元凱編『坤山公八十八年事蹟 乾』（林保登、1932年）所収。
- ・ 田辺太一著・坂田精一訳・校訂『幕末外交談』第1～2巻（平凡社、1966年）
- ・ 林董・由井正臣校注『林董伯自叙伝回顧録』（平凡社、1970年）
  
- ・ 田中正弘『近代日本と幕末外交文書編纂の研究』（思文閣、1998年）
- ・ 田中正弘著・通信全覧編集委員会編集『通信全覧惣目録・解説』（雄松堂出版、1989年）
- ・ 安岡昭男『日本近代史（増補新版）』（芸林書房、1989年）
- ・ 犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新』（日本放送出版協会、2001年）
- ・ 犬塚孝明『独立を守った“現実外交”』（NHK出版、2012年）
- ・ 簗原俊洋・奈良岡聰智編『ハンドブック近代日本外交史』（ミネルヴァ書房、2016年）

**外務省外交史料館特別展示「幕末へのいざない」展示史料解説**

平成 28 年 7 月 7 日 初版

※本展示解説冊子の一部を引用する場合には、必ず出典を明示してください。また、引用が一項目全体など長文にわたる場合には、事前に外交史料館にご相談ください。

**外務省外交史料館**

〒106-0041

東京都港区麻布台 1 丁目 5 番 3 号

Tel 03-3585-4511

